

## 慈恵病院の改革に貢献した ある医師団の実体について

### 1. 有志共立東京病院は経済的に行き詰る

高木兼寛が施療病院・有志共立東京病院（Tokio Charity Hospital）を開院したのは明治15（1882）年8月であった。病院の経費は有志の醵金によるものであった。

しかし高木にはこの病院を開院するときから一つの不安があった。それはこれからこの病院を永く維持していくのに費用をどのように捻出していくかということであった。そのつど醵金を募るにしても限度があるからである。

幸い、当時鹿鳴館で活躍中の華族夫人らはこの施療病院の創設にいたく感動し、伯爵夫人伊藤梅子、同井上武子、同松方満佐子、同大山捨松、同西郷清子ら13名が委員となって、患者の施療資金を集める組織・婦人慈善会を結成してくれた（明治17年5月）。そして有栖川宮熾仁親王妃董子殿下（続いて威仁親王妃慰子殿下）を総長に迎えた。

婦人慈善会が行った最初の資金集めは鹿鳴館での慈善バザーであった。大きいものは明治17年、18年の前後二回行われたが、いずれも大成功であった。とくに二回目には皇太后陛下、皇后陛下が行啓になり、婦人慈善会の救貧活動に深い関心を寄せられた。この二回のバザーで得られた売上金（1万5,000円）はそのまま同病院に寄付され、主に看護婦教育所の建設に使われた。

しかしこのようなことがあっても、長い目でみると、こうした募金活動を頻繁に行うわけにもいかず、もっと持続性のある資金集めが必要であった。患者は増える一方であり、医師は少なく多忙をきわめた。病院規則も「自今来

院者ニシテ美服ヲ纏イ或イハ資力アル者ト認ムルモノハ拒絶スルコトアルベシ」という項目を追加するほどであった。高木の構想によればこの病院の基礎をかため、さらに施設の拡充を図るには、なお10万円(現在の価額にして約10億円)の資金を必要とするのであった。何らかの病院機構の改革が必要であった。

高木は、英国での見聞から施療病院の運営はいずれ皇室の援助によるのが最も長続きする方法ではないかと考えていた。しかしそのために実際どのような手順でことを運んだらよいかは大いに考えるべき問題であった。

## 2. ある医師団が病院の改革案を提出

明治19年6月9日、婦人慈善会に(井上馨伯爵を通じて)この病院の改革についての一通の文書がとどけられた。その文書には差出人として著名な医師13名の名前が連署されてあった。この医師団は、この小論の主題であるが、その実体については後で考察するとして、まず彼らが提出したその改革案の中身から述べることにする。

改革案の要旨というのはこうであった。西欧文明国にならって、皇后陛下をこの病院の総裁に推戴し、そのお手元金をご下賜ねがって、それをもって病院を持続、発展させてはどうかということであった(これは上述高木の意向にもよく合うものであった)。そして婦人慈善会がこの改革案を推進して下されば、我々医師団はその診療、研究の面で是非協力させていただきたいというのであった。

実は、婦人慈善会ではもともと、帝都にたった一つの小さい施療病院(有志共立東京病院)だけでは貧弱すぎるから、いっそ新しい一大施療病院を新設したらどうかという意見が出されていた。しかし新たにこれを設立してこの有志共立東京病院と競わしめることは無益のことであり、やはりこの医師団の提案に従ってこの病院の事業を助け、その規模を拡張して、これを皇后陛下のご援助の下に置いたほうが良いのではないかと意見が変わっていった。

医師団の改革案を受け取った婦人慈善会は、その趣旨に賛同し、皇室への上奏を行うべく、伯爵夫人・伊藤梅子ほか29名の連署で、次のような上奏書を（皇后宮大夫をつうじて）皇后に提出した（明治19年6月30日）。

「天ノ斯民ヲ生ズルヤ、幸アリ、不幸アリ。然レドモ、齊シク吾同胞タレバ、幸者ハ応ニ不幸者ヲ助ケテ、其相憐相恤ノ仁ヲ致サザルベカラズ。……某等泰西文明諸国ノ例ヲ按ズルニ、富者仁人金ヲ贖シ社ヲ結ンデ、救済ノ病院ヲ建テ、其慈恵ノ心ヲ致シテ貧民ニ施与スルノ所トナシ、大抵其帝室ヲ推戴シテ首トナシ、或ハ皇后宮、若クハ皇女・皇妃親シク之ガ總裁トナリ給イテ、帝室ノ仁泉惠源亦因テ下ニ流達セリ。……」

頃日戸塚文海・伊東方成・長与専斎・池田謙斎・橋本綱常・高木兼寛・石黒忠恵・長谷川泰・岩佐純・実吉安純・佐藤進・緒方維準・大沢謙二連署シテ書ヲ本慈善会ニ寄せ、各々応分ノカヲ致シテ本慈善会ノカノ及バザル所ヲ助ケ、治ヲ病者ニ施シ併セテ病床実験ノ功ヲ広クスルノ便ヲ得テ、我国ノ医学ニ裨補センコトヲ期スル云々ノ旨ヲ以ッテセリ。本慈善会誠ニ該諸名医ノ助ニ因テ、更ニ本病院救済ノ規模を張大ニスル事ヲ得バ、某等区々慈善ノ意ハ、則チ稍之ヲ達スルノ緒ニ就ク者アラントス。……」

誠ニ泰西文明諸国ノ例ヲ参酌シ、併セテ古昔施薬院ノ制ヲ考エ給イ、本慈善会ノ上ニ臨ンデ之ヲ總裁シ給ウノ恩光ヲ下シ給ワバ、病院規模ノ拡張及ビ其施療救済方法ノ備具スル日ヲ期シテ待ツベキノミ。……」<sup>1)</sup>。

この上奏書に対して、皇后宮大夫より上奏の主旨が嘉納せられた旨のご沙汰があった（明治19年10月26日）。すなわちこれによって明治20年4月1日より、皇后のご眷護のもとに有志共立東京病院は大きく改革されることになったのである。

### 3. 改革案による病院の改組とその成果

皇后陛下のご眷護というバックアップが成立して、有志共立東京病院は大きく改組され、それによって大きく発展することになった。まず病院名は以後、東京慈恵医院と呼ばれることになった。そして病院の維持費は皇室の恩資金（と有志者の醸金）によって維持されることになったのである。また婦人慈善会は、これを機に東京慈恵医院会と改称し、病院と一体になることになった。婦人慈善会のおときはもっぱら華族の婦女子が会員の中心であったが、東京慈恵医院会に改組されてからは民間の会員が激増し、同会よりの醸金、寄付金も激増することになった。このような結果明治20年以降の平均年収は3万円近くになり、有志共立時代の2倍近くに上昇した。

収入、資金にかなり余裕ができたため、明治20年ころから病院の増改築が盛んに行われた。一号病棟(130坪)、二号病棟(130坪)、三号病棟(167坪)、看護婦宿舎(84坪)などみなその例である。また高木兼寛が主宰する医学学校(成医学学校)もこの時期に病院の構内に移転して、その付属のかたちになり、名称も東京慈恵医院医学学校(Tokio Charity Hospital Medical School)と改められた。これで病院と医学学校が表裏一体になったかたち、つまり高木がかつて学んだ英国セント・トーマス病院医学学校(St. Thomas Hospital Medical School)と同じかたちになったのである。

この改革によって、その後20年間、次の改革である東京慈恵会の設立にいたるまで、この病院は維持、発展し続けたのであった。

### 4. 医師団の実体について

さてここでこの改革案を提出した医師団の実体について考えてみたい。一体、改革案に連署した医師団はたがいに無関係な医師の集団にすぎなかったのだろうか、あるいはある目的をもった組織集団だったのだろうか。

いくつかの文献から、改革案提出に関する文章を一つ一つ引用してみると、

このようであった。「戸塚は、上奏して欲しいという請願書を外務大臣井上馨を介して婦人慈善会に提出した」<sup>2)</sup> や「戸塚文海、高木兼寛らは伯爵井上馨を経て婦人慈善会に意見書を送り、」<sup>3)</sup>、「戸塚文海ほか 12 名より、婦人慈善会に意見書を送り、」<sup>4)</sup> のように連署名を一々挙げないものもあるが、「井上馨伯爵を介して戸塚文海、伊東方成、長与専斎、池田謙斎、橋本綱常、高木兼寛、石黒忠憲、長谷川泰、岩佐純、実吉安純、佐藤進、緒方維準、大沢謙二の連名をもって請願した」<sup>5)</sup> や「院長戸塚文海は、伊東方成、長与専斎、池田謙斎、橋本綱常、高木兼寛、石黒忠憲、長谷川泰、岩佐純、佐藤進、緒方維準、大沢謙二の連名をもって、伯爵井上馨を介して、婦人慈善会に意見書を送り、」<sup>6)</sup> のように全員を連名したものもあり、要するに色々なのである。しかしその医師団がどのような目的をもった団体なのかについて触れたものはないのである。中には、「高木兼寛は、伊東方成、長与専斎、池田謙斎、橋本綱常、石黒忠憲、長谷川泰、岩佐純、佐藤進、緒方維準、大沢謙二らの、当時わが国医界における最高実力者と目される人々に呼びかけ、彼らの一致協力を得ることができた」<sup>7)</sup> とい

うように、高木の個人的な誘いで集めた集団であるように書かれたものもあるが、これまたその高木の選択基準なるものは述べられていない。

最近、筆者は日本医学会の歴史を調べているとき、第一回日本医学会開催（明治 23 年）の発起人団体であった  
イッユウカイ  
 乙西会の全員とこの改革案を提出した医師団

表 1. 病院改革案提出医師団、乙西会、慈恵会医院評議医員の比較

病院改革案提出医師団	乙西会	慈恵会医院評議医員
伊東方成	伊東方成	
池田謙斎	池田謙斎	池田謙斎
岩佐 純	岩佐 純	岩佐 純
石黒忠憲	石黒忠憲	石黒忠憲
橋本綱常	橋本綱常	橋本綱常
長谷川泰	長谷川泰	
戸塚文海	戸塚文海	
大沢謙二	大沢謙二	大沢謙二
緒方維準		
高木兼寛	高木兼寛	高木兼寛
長与専斎	長与専斎	
佐藤 進	佐藤 進	佐藤 進
実吉安純	実吉安純	実吉安純
	三宅 秀	三宅 秀

の全員とがほとんど同じであることに気がついた。そのことは両団のメンバーを同じ順序で並べてみると一層明らかになる(表1)。表中、緒方維準は乙酉会の会員に入っていないが、これはもともと彼は大阪の人であり、明治20年に帰阪したためであろう。また三宅秀は改革案の医師団には入っていないが、改革直後(明治20年)の同じ構成の病院評議医員の中には加わっているので、何かの都合で欠落したのでであろう。このような両医師団の酷似性は偶然とは考えられず、同一の医師団に由来していることはほぼ間違いないと思われる。

ではこの乙酉会とは一体どんな集団であったのだろうか。記録によると同会は明治18年1月に発足した会であり、同年の干支に因んで命名された。当時の東京医事新誌にはこのように紹介されている。「我が医学士社会に於いて最も高等の位置、若しくは名望ある諸君が毎二カ月に会合を設けて乙酉会と称し、一般医学の進歩より医政のこと等を論議し、その可決するものを以て折々政府に建言し、又は当局者に告る等のことを企てられたり。昨年来井上伯にはその企てを嘉せられ、其会議を参聴せられ、遂に会員の推薦によりて該会の名誉会頭を諾されたりと。当時会員は長与、池田、戸塚、高木、橋本、石黒、伊東、岩佐、三宅、長谷川、大沢、佐々木、緒方、実吉等の諸君なり」<sup>8)</sup>と。

つまり乙酉会の会員は、このように日本の近代医学の土台をつくった最高の医師たちだったのである(写真1)。ここにはその人たちの簡単な紹介と生没年および第一回医学会時(明治23年)の年齢を付記しておく。まず近代眼科学の基礎を築いた伊東方成(1831-98)59歳、ついで日本最初の医学博士である池田謙斎(1841-1918)49歳、ドイツ医学の採用を建議した岩佐純(1835-1912)55歳、陸軍軍医総監などを歴任して明治初期の医学界の中心となった石黒忠憲(1845-1941)45歳、外科医で東大教授・陸軍軍医総監を務めた橋本綱常(1845-1909)45歳、内務省衛生局長・済生学舎創立者の長谷川泰(1842-1912)48歳、海軍病院長、海軍軍医総監の戸塚文海(1835-1901)55歳、東大生理学教授で最初の医学博士である大沢謙二(1852-1927)38歳、海軍軍医総監、最初の医学博士で慈恵医大の創立者である高木兼寛(1849-1920)41歳、



写真1. ある日の乙酉会の面々

前列左より石黒忠恵、伊東方成、松本順、戸塚文海、長与専斎  
後列左より高木兼寛、大沢謙二、佐藤進、実吉安純、三宅秀

東京医学校校長・内務省衛生局長を歴任した長与専斎（1938-1902）52歳、佐倉順天堂一門で陸軍軍医総監の佐藤進（1845-1921）45歳、海軍軍医総監の実吉安純（1848-1938）42歳、帝国大学医科大学学長であった三宅秀（1848-1938）42歳である。みな年齢的には若い（平均年齢47歳）、この明治23年当時の日本ではもう医学界の長老だったのである。

要するに乙酉会は、わが国医学界の最高の位置にある超名望ある大家の集団であった。一般医学の進歩、医政のことを論議し、それを政府に建議するという進歩的医学団体であったのである。またこの東京医事新誌の同じ紹介文には「彼の恵慈病院設立の事も各会員より石黒、高木両君に其の創立規約の起草を囑せられ数日間両君の間に討論研究ありて遂に全結し、各員の規約締結も既に了り、不日着手になる由なり」という文言もあるので、この中の「恵慈」が「慈恵」のミスプリントであるとすると、これは先ほど来述べてきた慈恵病院の改革と関係があることなのかも知れない。

また乙酉会の会員にはもちろん高木兼寛も含まれているので、先ほどの病院改革案のなかの皇室による援助のことは高木自身の主張だったのではない

かと思われる。先述のようにもともと高木は英国留学中からそのような考えをもっていたからである。

## 5. あ と が き

くり返し述べたように、慈恵病院の改革案を提出した医師団は乙酉会という明治維新以降のわが国医学、医療をリードした最高の集団であったと思われる。慈恵病院はこのようなわが国最高の医師団の奉仕精神によって改革された、かなりパブリックな存在であったのである（そして上に見た通り、この改革によって慈恵医学校もまた大きく発展することになったのである）。

面白いことに、この奉仕精神はさらにその後も生き続け、この病院改革の20年後（明治40年）の改革、つまり東京慈恵会の設立の時にも、この医師団は病院の評議医員として活躍しているのである（表1）。何人かの人が空白になっているが、これはすでに逝去された方々であり、ここに評議医員として名を連ねた方たちは老躯に鞭打つての（平均62歳）ご奉公であったと思われる。

## 文 献

- 1) 東京慈恵会。東京慈恵会総裁威仁親王妃慰子殿下御事蹟。東京。1926. p. 19-21.
- 2) 吉村 昭。白い航跡（下）。東京：講談社；1991. p. 149.
- 3) 慈恵看護教育百年史編集委員会。慈恵看護教育百年史。東京。1984. p. 29.
- 4) 高木喜寛。高木兼寛伝。東京：大空社；1998. p. 134-5.
- 5) 慈恵医大創立八十五年記念事業委員会。東京慈恵会医科大学八十五年史。東京。1965. p. 636-7.
- 6) 慈恵医大創立百年史編纂委員会。東京慈恵会医科大学百年史。東京。1980. p. 545.
- 7) 慈恵医大創立八十五年記念事業委員会。高木兼寛伝。東京。1965. p. 164-5.
- 8) 乙酉会。東京医事新誌 1886；407：92.